

# 前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

東 皓 傳

（受付 2002 年 10 月 11 日）

## 序 論

### 1 広島沖積平野の生成

- (1) 生成以前
- (2) 沖積世・沖積平野

### 2 沖積平野の自然的基礎

- (1) 概観（領域の設定）
- (2) 八木の狭隘付近
- (3) 中筋低平地
- (4) 新庄の咽喉部

### 3 とくに八木用水について

- (1) その現状
- (2) 建設の史的事情
- (3) 取水地点の設定

## 序 論

四面環海で狭い陸地，しかも山地が広く発達し，主な居住地は一般に海岸部にあるわが国では，湾入部は生活面でも陸海の双方に関係をもつ有利さがあつた。東京湾，伊勢海，大阪湾，広島湾などがそれに該当するが，これら諸湾は内奥の湾頭部に歴史的にも大きな人間の諸活動の舞台を提供し，湾部一帯から周辺地域へ影響を与えてきた。このなかから，広島湾を取り上げて問題を整理してみたい。なお，時代的には先史から維新前後に絞ることにする。

さて，先史古代から現代へ広島湾頭部一帯において，歴史地理的立場でも多くのテーマがあり，相応に解説がなされてきた。曰く，広島沖積平野

の形成、中小田古墳と三角縁神獸鏡の存在、緑井郷に続く古代郷の所在、古山陽道、12～13世紀以降での東国武士の進出（守護、地頭）をめぐる地域の変化、17世紀前半と思われる築堤による農耕地の拡大、古代～近世での郡名の変化、地名の追及、八木用水、中島用水、川ノ内用水、小田用水などの灌漑用水の諸事情、中世厳島社領と年貢の積み出し（川船から海船への仲継）、佐東八日市、四日市などの河港、太田川の水運（川船、筏）など枚挙にいとまがない。これら諸問題の根元には何を考えるべきか。

すなわち、それは自然的基礎である。地域がもつ自然に対して各時代の地域住民が開発をめざして真剣に取り組んできたわけである。この人間的な取り組みの本格的なものは7世紀の大化改新による国郡里の制定であり、条里制の施行であろう。里は後に郷に変更されるが、畿内を包む七道では山陽道から西国道が当地に関係した。とにかく、畿内から西国（九州）へ急ぐための近道を求めようとした安芸では高原、海岸に平地がなく止むを得ず内陸に入ること、内海へ注ぐ多くの河川などが真正面から対立する状況下にあった。陸路による山陽道、南海道からの陸路による年春米の貢納は地元には非常な負担を与えたので、奈良時代の孝謙天皇の時代（8世紀半ば）では上記2道については梶取に責任を負わせる形で海送を許可している。安芸府中付近は陸路だけではなく、海路との連絡を考える位置にあった。そして、近世になると西国路はデルタ部に引き込まれ、湾頭部では海岸を通ることになる。また、自然現象でも太田川の移動（1600年の初め頃、本流が古川から現在の河道へ移動したという）があり、デルタ部での城下町建設で地域の中心も金山城（<sup>かなやま</sup>銀山城）から広島城へ移ることになる。この間ではもちろん、広島デルタの自然的成長に加えて人工的な拡大強化があった。開発と進行はこのような陸地形成の上に展開したのであった。そして、戦前の昭和期のなかにみられる近世の広島城下町の区割や海上交通への配慮など多くの問題に当面する。

話は戻るが、中国準平原（吉備高原面の隆起）にともなう中国山地脊梁面の形成、その波状曲隆運動としての内海区の沈降を考えると、400～600

米級の準平原面がかなり内海区まで迫って発達しており、そのために沖積世を迎えての沖積層の発達をかなり限定的な広さにせざるを得なかった（太田川河口から20軒上流程度）事情に思い至ることができる。本論はこの背景面から入りたい。

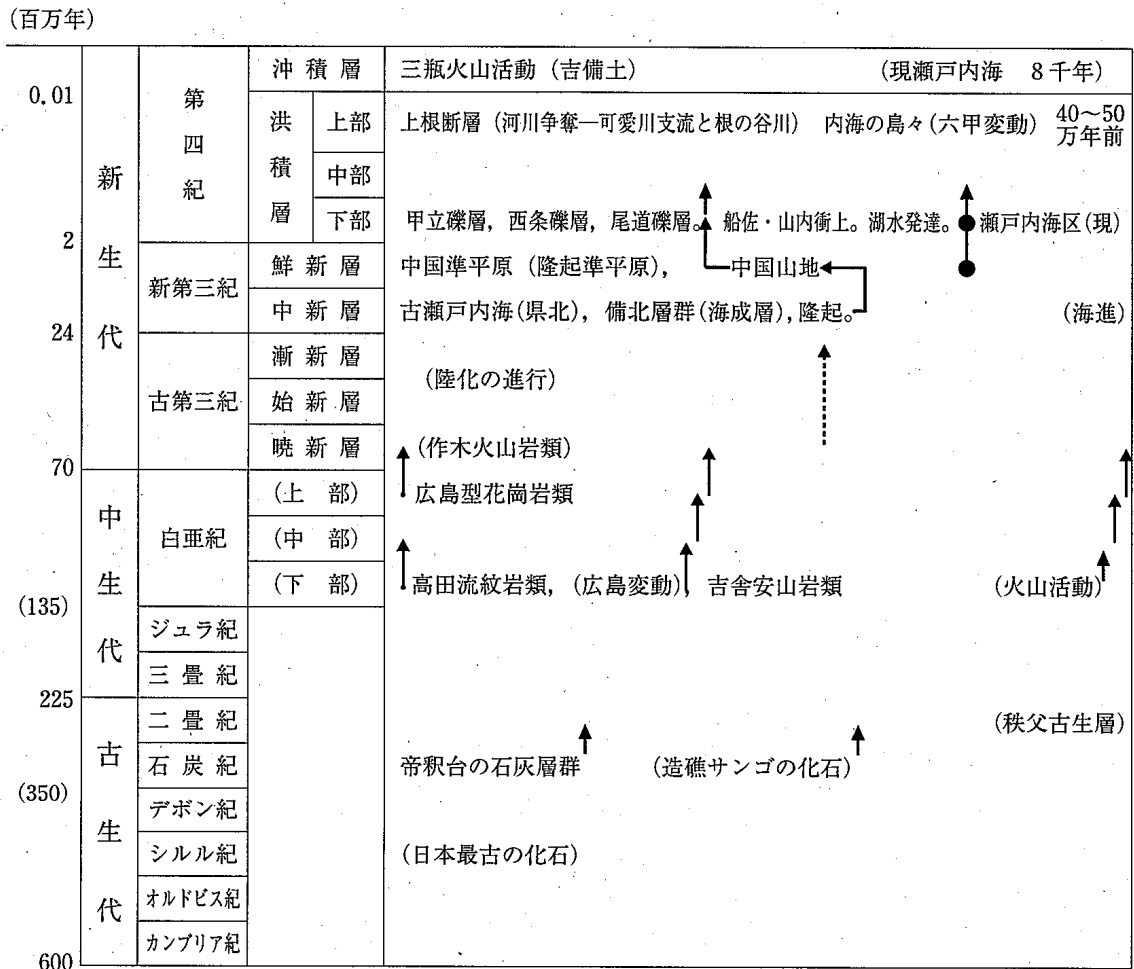
## 1 広島沖積平野の生成

### (1) 生成以前

周知のごとく、6千万年から7千万年以前の中生代後期の大規模な造山運動があり、これによって現在の日本列島の凡その骨組ができ上がったという。わが国対岸のアジア大陸は、すでに古生代の終末頃には陸化しておりこの古生界に続く中生界（中生代の地質）もだいたいのところ陸成層から成っており、それは日本列島の内側（すなわち日本海側）に分布する中生界の陸成層に類似しているという。中生代では、日本はまだ日本海（韓国では東海）はなく、アジア大陸の東縁部であったろう。日本は砂岩、泥岩、礫岩が多く、海成層と陸成層が入りまじっているため、中生代には何回かの造陸運動があり、そのたびに海進・海退を繰り返したものであろう。そして、中生代の後期（白亜紀）になって造山運動もはげしくなり、わが国の各地で花崗岩が貫入し、また変成作用をともなって、少くとも本州・四国・九州の全域にわたるような褶曲山脈ができた（図1）。

つぎの新生代は7千万年前くらいから2百万年前くらいの間の第三紀（日本によくみられる）と、それ以後現在に至る第四紀がある。第四紀は2百万年以降1万年前あたりまで続き（洪積世）、1万年以上が現在の沖積世であるとする。第三紀の後半には大規模な海進があり、日本の陸地は奥地まで海水で覆われ、古生代や中生代の造山運動でつくられた古い山地が島状に残った（日本の島国時代）。中国地方でも日本海から入江のように入り込んだ多島海状を示し（中国多島海）、この海は一般に古瀬戸内海（第一瀬戸内海）とも呼ばれる。そして、第三紀も終りに近く3百万年前後では、第一瀬戸内海の南側で琵琶湖や現在の瀬戸内海を含む地域が沈降し始めた。

図 1 関係する地質年代



これが第二瀬戸内海 (現状) への出発であり, 後に海進を受ける。中国山地はこの第三紀末から次の第四紀洪積世への地下活動の変化を受けて大きく形成されていく。

図 1 で中新層をベースに考えて最高位にある<sup>あづま</sup>吾妻山 (広島県比和町・島根県1238.8米) で1020米付近に鮮新層のものと思われる小円礫の吾妻山礫層が発見された。(1959今村) すなわち, この脊梁山地が備北層群の堆積後 (高度800米が最大だが断層によって陥落した結果) もなお, 小円礫を堆積させるような低位で備北層群も新しい環境に置かれていたもので, 脊梁山地における平頂面の存在にヒントを与えているかも知れない。そこで, 中国山地脊梁地帯を頂点に波状曲隆運動を広域的に考えると, 山間部に並行する盆地列に加えて第2瀬戸内海 (現在) の沈降を受けた児島湾底の-350

米前後の比較に至れば、その落差は約2千万年で千米にもなり<sup>1)</sup> 岡山・鳥取の県境部までは約70軒の幅でしかない。しかも中国山地は幼年期を迎え、過去30年間で10軒程度隆起しているといい、内海部では沈降する部分もある。中新層をめぐる地層の研究は、それが陸・水に関するだけに1つの重要課題であろう。

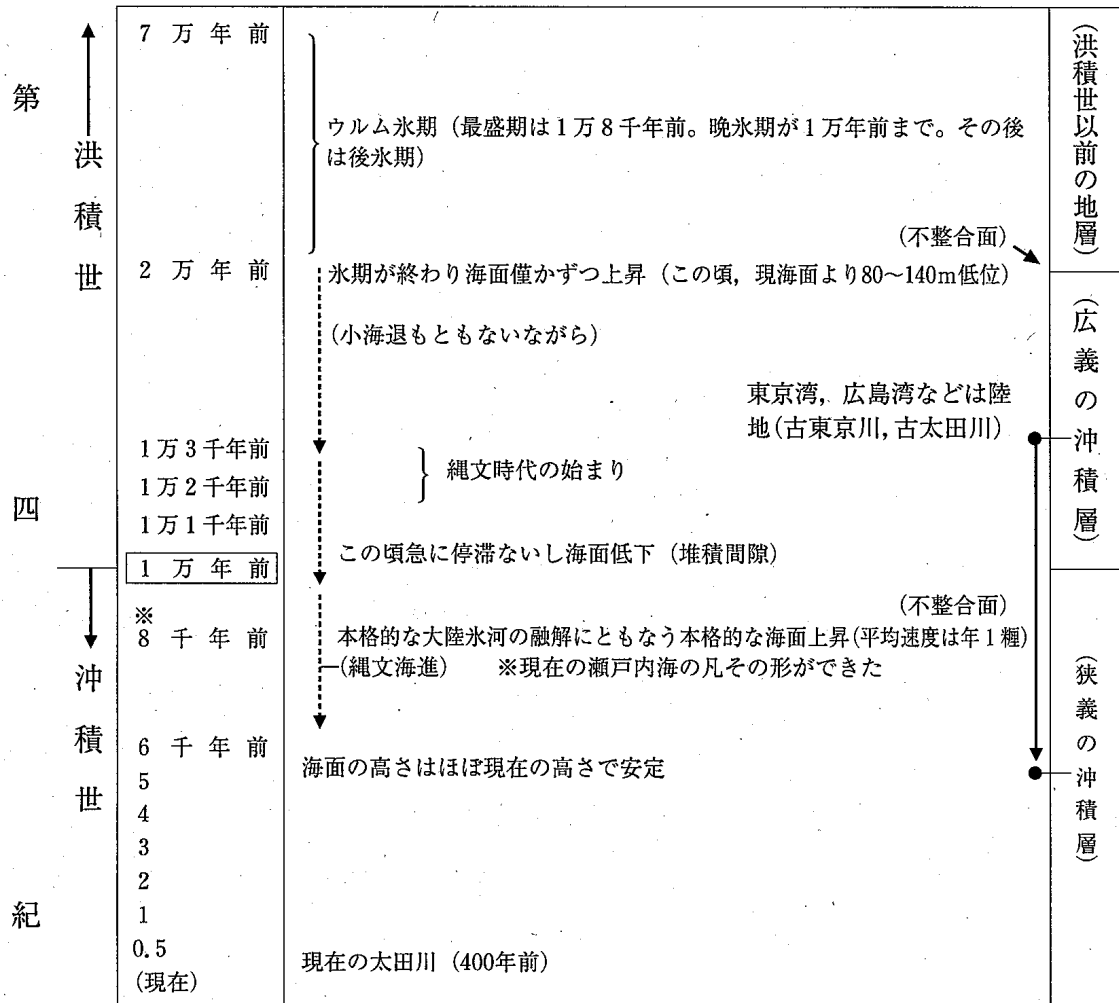
## （2）沖積世・沖積平野

図2は、凡そ2百万年前からという洪積世の終末期から沖積世の現在に至る展開の関係部分を示したものである。当地は、右端にあるように大きく三段の地層を経験しており、2万年前（1万8千年説もある）からの広義の沖積層と1万年前からの狭義の沖積層との間には不整合面があるという。すなわち、堆積間隙の存在について広島ではどう具体的に説明されるのであろうか。これからの1テーマになろう。ほぼ1万年以降では現在にみる砂層の三角州性堆積物（頂置層）があるけれども、下部にはそれを支える前置層がかなりの厚みをもって沖出ししており、さらにその下部では底置層がさらに先へ伸びている。沖合の埋立を可能にしているのは前置層の存在であり、現在の土木技術では採算面を考えないとして深度20米付近まで可能という。前置層の発達程度がデルタの開発度に関係するわけである。

さて2万年前あたりと思われるが、現太田川デルタの末端で、最終氷期の低海面期での古太田川の河床は-30米であったという（『中国地方の地形』）。仮りに古太田川と現太田川の河床の傾斜を可部以南（沖積地の始ま

1) 2千万年で1千米の滑落・上昇なら、単純な仮計算では20年に1耗となる。同様に、太田川放水路沖の海底では現在のところ150米で中生代末期の花崗岩の岩盤に達するという。太田川水源部一帯の恐羅漢山は1346米であるから、その差は約1500米になり、1耗に約13年かかったことになる。しかも両地は直線的には僅か40軒しか離れていない。もしもこの形で考えるなら、大きな変動数値と考えてもよいであろう。中国山地部の隆起と内海部の沈降に曲隆運動を考えると、已斐断層と大地震の関係も長い時間のスパンのなかで発生が予想されているが、その際は太田川流域でどのような変化があるというのだろうか。

図 2 洪積世、沖積世関係



り)で同列に考えれば、現状で河口と可部で20米の差であるから、可部南で古太田川の河床は-10米になる。とすればこれからふれる下八木・上緑井〜川内頭部の10米ラインは-20米あたりであったろう。すなわち、この10米ラインあたりは2万年かかって形成されたことになる。2万年で20米の上昇ということは単純に平均化して、1年で1釐の上昇ということである。それであっても、庚午で考えた西側山陵筋の20年で1釐の沈降(注1))が当地でも考えるとすれば、前太田川の古川が長期に亘って河道を維持し得た1要因になるのではないか(先述)。

ところで、表1は広島沖積平野形成について纏めたものである。概観すれば①〜④の海成層(全国的表現によれば①〜③)と、その上に載る⑤〜

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

表1 太田川沖積地形成の次第（『広島県地質図説明書』、『中国地方の地形』よりまとめたもの）

	下部から上部へ	内 容	わが国主要沖積平野の堆積物
①	洪積砂礫層	海進の影響を受けた古太田川は、河川勾配があっても沈水によって流れは止まり、浅海性の細粒による埋積が始まる。 砂と粘土の互層。砂優位も。	①沖積層基底礫層 低位海面期に形成の扇状地性河床礫層。
②	下部砂層	デルタ末端部で多少なりとも流れがあれば砂層がめだつ。礫や粘土を含む砂で粗粒相。この層準は4～5米という（最大で13米）。広くデルタ全域に。	②沖積下部砂層 海進期に形成された三角州前置層（三角州形成のための直接の土台）。
③	上部泥層下部	粘土優先。下部では砂・粘土の互層をみる。時に砂の増加や礫のはさみも。	③沖積泥層 縄文海進期が最も著しい時期に形成された三角州底置層。
④	上部泥層上部	厚さは6～30米という。潮間帯直下の泥の環境下。貝殻や植物の多産。	
	(海成粘土層)-----	(海成堆積域の最大)-----	(沈水部は上流へ最大域に)
⑤	上部砂層 (陸成層)	粘土やまれに礫の混合する砂。厚さは4～5米、最大10～11米前後。 河口ではデルタの前進が始まり、海域からデルタに変わった場所では河床勾配が零から正に。太田川の舟運にみるデルタ部の河渚え。海生貝類は産出しない（陸成層）。	④沖積上部砂層 海進作用が緩慢化した後に形成されていく三角州前置層。
⑥	最上部砂泥層	砂をまじえた粘土層で厚さ4米以下。	⑤沖積陸成層 自然堤防、後背湿地堆積層など④の上に形成された三角州頂置層。
⑦	(最上部砂礫層)	礫・粘土をまじえた砂で厚さ4米程度。	

⑦（同④～⑤）の陸成層に分けられる。海底堆積物は陸源性と遠洋性に 2 大別され、前者は海岸付近や大陸棚、大陸斜面上にある。そして、第 4 紀の氷期と間氷期における海水面の上・下降の変動の影響を受けており、海岸近くから沖合へレキ（礫、粒径 2 耗以上）→砂（同 2 ～ 1/16 耗）→泥（同 1/16 耗以下）という順序になるとは限らない。後氷期に入ってから海進も時間が浅く、かつての陸源性のレキや砂なども沖へは運ばれておらず（浮泥は別として）、水深 20 米くらいまでは波の作用その他で運搬堆積されている程度である。表 1 における①もそのあたりのことを裏書きしているようだ。②→④と海水面の上昇限界に達し、浮泥からつながる泥層がめだつ。すでに①の段階から陸源性堆積物は供給されていたが、⑤のあたりからそれが本格化したようで、その厚みは最大で 10～11 米といわれる。そして、⑥～⑦と流れの殆んど止まる部分も増加し、レキにまじって砂や泥、粘土の層がみえてくる。

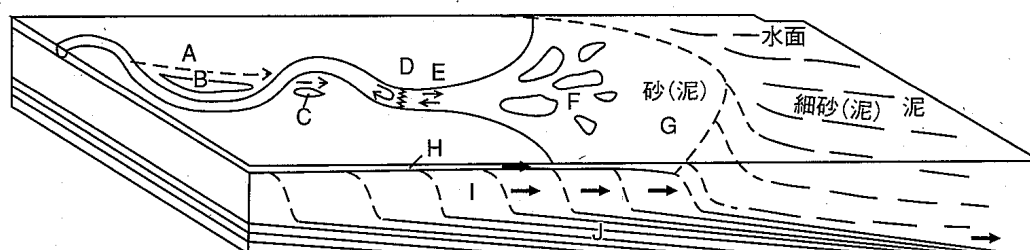
なお、表 1 の右列の三角州や太田川下部を想定した概念図として図 3 を掲げる。らっぱ状に開いた河口部に州が形成され、デルタに成長していく。H はデルタに直接している頂置層で、その下を大きく支えているのが前置層であり、さらにその基礎に最初の河川運搬物の底置層がある。G の干潟の先端部は傾斜をもって海底へ向かっており、広島湾頭では、海成層の時期における三角州の形成（G の広がり）の上に陸成層を中心とする三角州の広がりが重なった部分があり、沖出しの方が前者に関係するのではない。広島湾頭部では水深 20 米を超えると深さが大きくなる。現在は水深 10 米をめざして各地で埋立が進行中である。

現在の国土交通省太田川工事々務所（前建設省）の関係者の間では、現在の太田川放水路（太田川とし、かつての太田川筋は本川）を含む河流について、放水路河口部から己斐付近までが下流、当地から放水路の取り入れ口（祇園水門）、市内分水堰（大芝水門）のあたりまでを中流とし、それから上部はとくに限りを設けず上流としている。確かに己斐―百米道路（平和大通）の東西線より南は人工デルタとみてもよいであろう。そして、中



東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

図3 河川下部および扇状三角州の模様



- A 後背湿地を流れる小河川（洪水時の分流）
  - B 自然堤防（本流を外れた部分，砂礫の堆積）
  - C 池（旧流路）
  - D 河川感潮部の限界（河水逆流—灌漑用水に利用）
  - E 上げ潮，下げ潮
  - F デルタ部（形成—自然・人工）
  - G 干潟（養殖地，先端部からは深度を増す）
  - H 頂置層
  - I 前置層
  - J 底置層
- 矢印 陸地の成長方向

流部はデルタの始まる新庄付近までとなる。国の太田川河川での管理区間は山県郡戸河内町上本郷の明神橋より下流部であるから、放水路での下流・中流に比べてその上部はかなりの長いものになる。

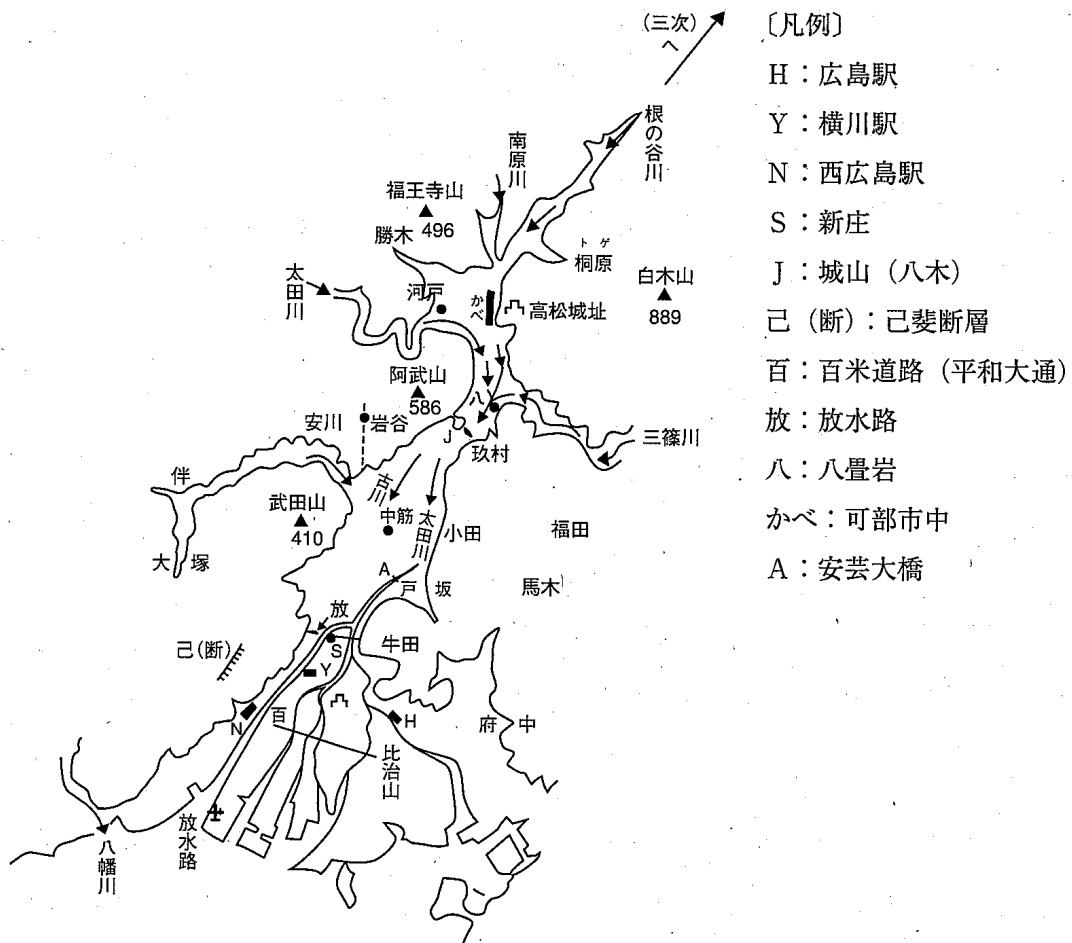
## 2 沖積平野の自然的基礎

### (1) 概観（領域の設定）

湾頭部における陸地の形成なら己斐・草津などから西へ、また東では府中から海田あたりも考慮せねばならないが、今回は太田川下部流域で、可部以南から新庄付近までの領域に絞りたい。川に支配されて形成された沖積平野と考えたためである。図4は、今回の検討する地域の概要を示したものである。すなわち、ここでは「八木の狭隘」、「中筋低平地」、「新庄の咽喉部」なる諸語を使用することで述べていきたい。

可部の市<sup>しちゅう</sup>中の南部では、その市中を形成させた自然堤防に係る北からの根の谷川（支流に南原川＝可部川）、東<sup>なばら</sup>の深川<sup>ふかわ</sup>からくる三篠川、それに

図 4 可部市中以南地域の概要



太田川の本流筋の 3 者が合流する。そのあたりに有名な八畳岩があり、水深も大きい。渦流があり、舟運や筏において要注意箇所であった。J は八木<sup>じょうやま</sup>の城山であるが、直接の対岸は玖村の小低地があり、古い地図ではデルタ地形がよみとれる（後述）。諸木川<sup>もろき</sup>や落合川（岩ノ上川）はともに太田川の水勢に圧倒されて南へ大きく曲げられている。「八木の狭隘」は当地で河幅はほぼ 500 米たらずである。大出水を経験すると当地は激流が狭隘部で方向を変える。可部の市中南部で、高度 20 米（このあたりから南へ沖積が始まるという）であるが、八木の狭隘部の水辺は約 15 米である。

狭隘部を出ると、なぜか前太田川（現古川）は西寄りとなり分流をつくりながら、少なくとも 1500 年程度はその河道を変えず、流水を維持してきた。

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

この「八木の狭隘」から南へ約7000米で「新庄の咽喉部」に達する。この中間地域は「中筋低平地」とよびたい。このあたり一帯での古くからのことばとして「中筋」なるものがあつた。それは大水の際の水筋に当たるところにつけられた名称であるという。当地は東西幅も少し余裕があり、3000米～4000米級である。「中筋低平地」の特色は先ず2つある。すなわち、①—高度10米のラインが西側の下八木・上緑井あたりから川内の頭部を通して東の対岸の矢口側につながっていること、②—東西山麓は高度10米のラインがそのまま新庄の咽喉部を通過して、さらに南下しデルタ部左右の山麓に逃げており、中筋低平地での大洪水は山麓の10米あたりまでを覚悟せねばならなかったということ、である。

つぎに「新庄の咽喉部」がある。1600年代の当初に現在の太田川本流筋を形成したというこの川は「新川」の名を残し（先述の古川と対比）、当初は勢いよく現在の西の山手寄りの山手川へ押し流れていたという。とにかく、この中筋低平地では東野の堤防（太田川）が切れても西流しがちであり、古川の存在も合せて西側に水を導きやすい地下での傾きがあるのではないか。西寄りでの堆砂の高まりが、かつての西低東高を西高東低に変えてきて、現在のところ凡そ400年が経過しているわけのものではないのか。話を戻そう。この水勢のなかで自然堤防の一部として新庄付近の微高地が生まれ、大芝以南での州が形成されていったろう。旧長東南の大きな州の高まり（開発されて土手組の集落名を残す）では堤防らしいものもあまりみられなかった程である。そして、放水路工事では弥生時代の「太田川放水路固定遺跡」が水面4米のところから発掘されたという。このあたりも歴史地理として重要なテーマになる。

なお、この「新庄の咽喉部」の更なる特色は感潮部であるということだ。川上からは砂を運ぶ水勢が1日2回の満潮時には止められ、河水は押し戻される。堆砂も始まるが、現状では戸坂<sup>へさか</sup>の「安芸大橋」付近まで感潮する。河水と海水が交錯するところでは引き潮時では水位が下がり難いという。このところも十分に考えねばならない。交錯した部分では海水の表層部は

塩分を含んで密度が大きいので下流へ向かってその下部で向きを変えするという。同様に河水と出合いの部分で下流へ向きを変え、表層部の下側で海の方へ流れていくという。押し戻された表面の河水は後背湿地を流れる川や自然の溜池（かつての河道変遷後に形成されたもの）などに蓄えられ、或は水田にそのまま逆流して、自然灌漑に役立てられたものと思われる。半ば塩分を含んだ水質でもあるから、それを避けられる程度まで水田開発も進んでいたことであろう。その限界はどのあたりでみられるものか。当時の微地形も考慮せねばならない。

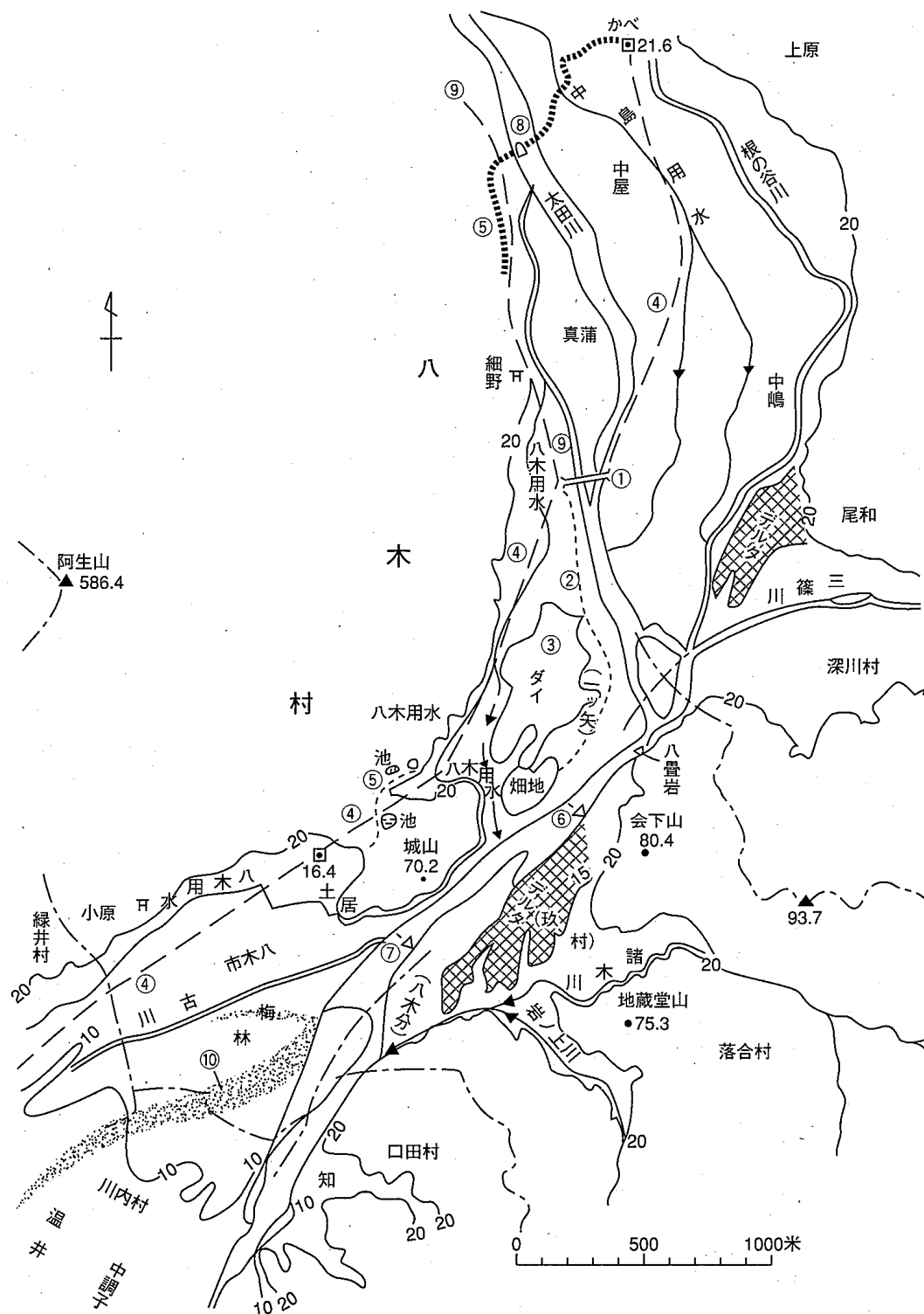
## (2) 八木の狭隘付近

八木の狭隘は、凡そ右岸の城山<sup>じょうやま</sup>と左岸の会下山<sup>えげやま</sup>の間で、高度20米のラインが通る河岸付近の間を考慮しており、その距離間は約500米である（図5）。北の可部—亀山—帯の福王寺山麓からの土流れの方向と西から来て南下する太田川の地形方向は直角交差であり、可部南当たりからこの狭隘<sup>しちゅう</sup>へ向う一帯から広島<sup>しちゅう</sup>の沖積地が広がることになる。南北方向の可部市中<sup>しちゅう</sup>の東側を南下してきた根の谷川は、精一杯東の山麓まで振られているが、もちろんかつての太田川の本流に押されたものであろう。旧深川村尾<sup>おわ</sup>和付近のデルタ両川<sup>おわ</sup>の合作に一部三篠川も加わってのことであつたのか。また、中島用水（藩政時代は高宮郡中島村）の施工を容易ならしめたのは太田川のかつての分流路であつたろう。これは寛文6年（1666）のことで、畑は残らず水田化されたという<sup>2)</sup>（『文政二年高宮郡郡志御用につぎ下調べ書出帳』）。また、太田川も古くは図中の矢印の方向で流れていたという。太田川、三篠川、根の谷川一帯で幅広一様な大雨を経験するとすれば、3河川の会する八畳岩付近での出水は河川延長

- 2) 元和5年（1619）では村高が162石9斗2升であつたが、寛永15年（1638）では552石7斗7合になり、文政2年（1819）では579石6斗2升1合とあまり変わらない。1619年から1638年で急増しているが、用水は1666年としているので、用水路の工事は早くから行われており、1666年は完成年と考えるも可である。いずれにしても、現在も350年に近い歴史を刻んで実働している点に、当時の技術度の高さを知ることができる。

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

図5 八木の狭隘および中島



〔凡例〕

- ① 太田川橋
- ② 太田川右岸を南下していた自然堤防
- ③ 「ダイ」は中州
- ④ 旧国道
- ⑤ 石見路（近世）

- ⑥ 一ツ矢の渡し
- ⑦ 玖村の渡し
- ⑧ 上ノ渡し（渡場集落）
- ⑨ 太田川内陸部の発電所建設の資材、設備運搬路（整備）
- ⑩ 洪水時の水路（古川筋と同一水面）

から判断すると、

A 根の谷川 16.9 軒←南原川 (7.7 軒) 他

B 三篠川 42.4 軒←関川 (13.7 軒) 他

C 太田川 約 80 軒 (水源部～可部間)

となり、A → B → C と段階的な洪水波の到着が予想される。八畳岩から南への水勢の強さは玖村<sup>くむら</sup> (藩政時の呼称、明治 22 年の大合併では落合村玖) にデルタを形成させた。同様に深川村尾和のデルタも太田川本流筋と根の谷川のコ作であり、東側は三篠川の洪水によって削られたものであろうか。

八木の狭隘で狭められた水勢の一部は八木側の「ダイ」付近へ逆流する。そこはかつて太田川筋の流路でもあったという。そのとき地元での古称「ダイ」(代) も大きな洲の一部であったと思われ、そこでは太田川の洪水で水が逆流しても家までくることはなかったという。なお、一ツ矢 (一ツ屋) は文政 2 年 (1819) の差出し帳をもとにした『芸藩通志』では高宮郡玖村分であり、逆にデルタ南部の一部は沼田郡八木村分となっている。

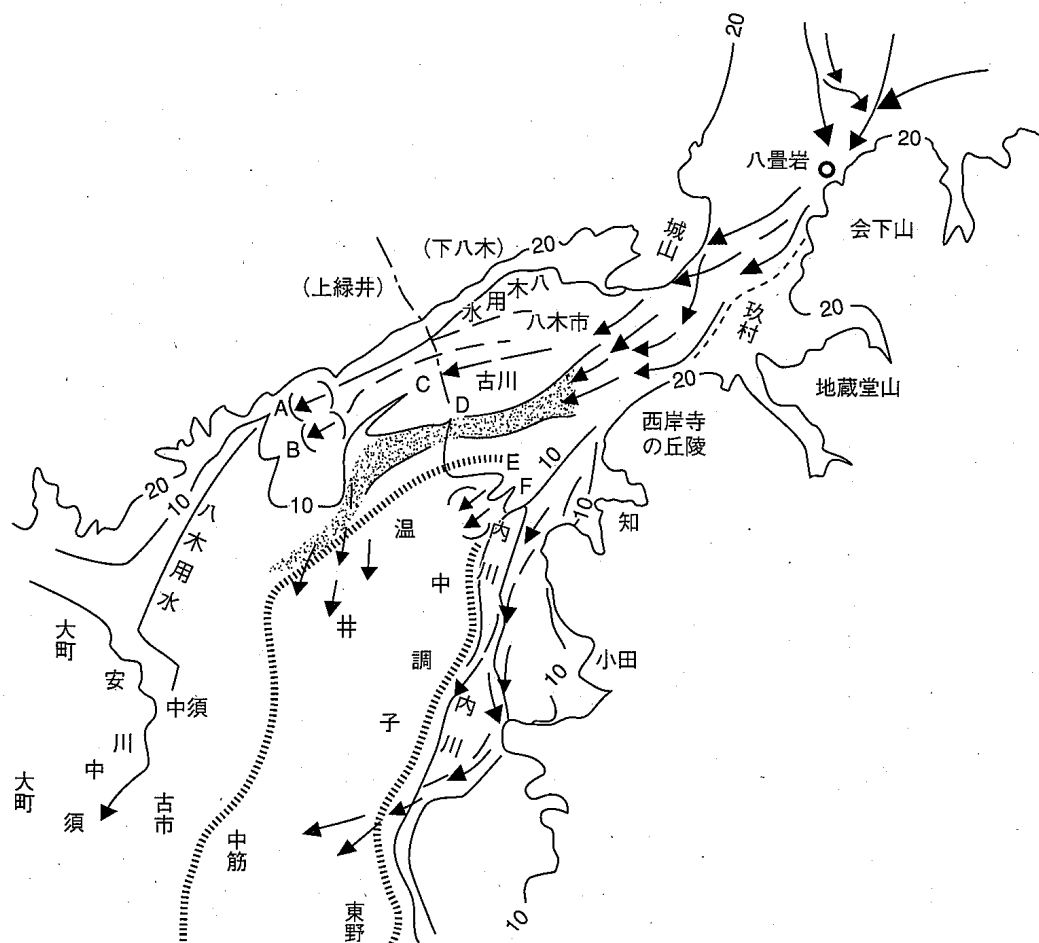
ところで、玖村のデルタをつくる程の勢をもつ太田川の水流れに、他の 2 川の洪水を加えた大きな水勢の一部は、八畳岩付近の出張りで刎ね返り、城山の北にぶつかる。その反動は対岸の西岸寺<sup>さいがんじ</sup>の丘陵山地 (旧口田村分) に当たって、図中の⑩へ押し出す<sup>3)</sup>。平素は分流の古川筋が流路の中心である。現在、この⑩のルートは第 1 古川と呼ばれ、「せせらぎ公園」としての整備が進んでいる。周囲の都市化が進むなかで憩いの場として、高瀬堰からの一定量の水を放出して、小川の体面を保っている。近くの砂原に近世に梅林として名をあげるようになった。

なお、洪水の水勢を模式的に表現したのが図 6 である。先述したように根の谷川、三篠川の合流に太田川の本流筋が加わって本格的な洪水の威力が発揮されたようである。すなわち、八畳岩付近から南下する水勢 (洪水

3) すなわち、玖村側では諸木川<sup>もろぎ</sup>、岩ノ上川 (後に落合村となって落合川) は両川が合する付近から一気に南の山際に押し込まれて、川下で太田川に合流する。デルタ形成の水勢の強さを知ることができる。

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

図6 洪水時中心の模式図



時)では、先述の城山～西願寺の丘陵の刎ね水もあろうし、会下山の刎ね水もあろう。城山の下は渚になり（特に洪水時の渦巻きのためか）深い。かって、太田川下りの川船が広島で揚荷をすると船頭は商談をするが、その間にトモノリは午後のマジ（南風）に帆をはらんで（一部の瀬はホソビキで船を引っ張りながら）この渚まで戻る。そして、船頭が可部線で梅林駅まで戻り、歩いて帰ってくるのを待っていた。ここは、利用度の高い「玖村の渡し」でもあり、多くの船がモヤイする程広い水面をもっていた。

さて、その水勢はまずDに殺到する。Dは洪水時中心の水路の様相をみせていたようである。平水時は八木<sup>いち</sup>市集落が古川の舟運のターミナルであり、近世当初からの石見路が通っていた。なお、西願寺の関係した丘陵というのは現在の「はすが丘団地」あたりである。ここに北の玖村（藩政

村)と矢口村(同)の境界があるわけだ。

### (3) 中筋低平地

藩政時代の中筋・古市村は、中世の古市、中筋であったが、それは農業を基盤とする政策に従って村ごとの石高を或程度揃えるために、商中心で狭域の古市と古川を挟んで対岸の中筋(農業中心)を合わせて1村にしたものであったようだ。中筋地区は洪水の水勢の通り道であった。東の太田川からの水、北の旧温井村(藩政時代)の堤防切れ、安川出水による中須・古市の冠水なども直接間接に影響していたようだ。

さて、見出図にあるように太田川右岸で下中調子<sup>しもなかじょうし</sup>付近では河道が西へ寄り、そのために堤防も西へカーブしている。水勢の強く当たるところで、ここには東野サイドで水勢を殺ぐための四角に組んだ石塁を河面に突出させた構造物を川上から川下へ3重列に建設しており、下の河水は深くて年輩の子供たちの恰好の水浴場でもあった(図の太い矢印は決壊時における水勢の方向)。近くには堤防の傍に地元の東野の氏神「堤平神社」<sup>ていへい</sup>があり、その名称を考える限り、堤防の安全を願ったであろう先人たちの気持が伝わってくる。先述した旧温井村では太い矢印も含めて古川沿いの堤防が決壊しがちであった。堤防のゆがみ(矢印付近、その左の○印は昭和橋=現在もその名を残す)もその証拠になろう。この橋への里道は旧温井村から旧国道の緑井への重要なルートであった。さて、安川であるが、旧中須村(藩政時代)付近では右折して南下するものの、左岸が決壊すれば一気に古川へ向うこともあったらしい。そのためでもあろうか、古市の集落の上手でYと示している小道は高さ約3米以上の堤防であり(建設は江戸時代であるが年代は不明)、これによって古市は緑井方面から南下する大出水も含めて、洪水被害を避ける確実性を増すことができた。この堤防は「横土手」と通称し、明治42年(1909)12月18日古市市街地部の西側を通過して古市橋から七軒茶屋へ開通した可部軽便鉄道は、ここでも乗客が降りて客車を押し上げたところという。



古川はかつて相当の流量をもつ河川であったことは中筋から下手へ東原・西原付近での堤防の広がりからも推定できる。西偏しがちな古川であるが、古市の下は古川地区でその南は旧西原村（藩政時代）との村境になる。ここもよく決壊し（太い矢印）、そのために池ができ江戸時代の西原は<sup>じゅんさい</sup>蓴菜の産地（ひつじ草科、若芽・若葉を食用に、ぬなわのこと）であった。干損に悩む西原村民の灌漑用水への熱望に、広島藩が最初に考えたのが当地であったことを考えても、増水すれば簡単に水の通り道になったということを暗示している。地名に「古川」があるのもおもしろい。江戸時代の当初という太田川本流筋の変化（慶長12年—1607、現太田川へ）により、洪水の一時期を除いて古川への水の供給は減少し、安川も古川の分水路であった流路を利用するようになった。安川も古市の西側から西原へかけて左岸の堤防はとくに強化され（決壊後も修覆は早目）、中須側はともかくとして、旧西原村になると左岸のみが強い土堤で、右岸は自然堤防まかせのものであった。そのために不連続堤となり、洪水時には<sup>じょうごん</sup>上言土手に沿って水勢は逆流して大町や中須の下手を冠水させた。それは先述した八木の狭隘の上手のところで太田川の右岸が不連続堤になり、洪水が逆流するのと同様である。

ところで、安川の洪水から西原を守った左岸の堤防も見出しの地図にあるように途中では消えており、安川はかつて堆積した広い砂州のなかでも下刻する形で流れるようになる。この安川の川筋では、古市の西側のあたりで河道に沿って自然堤防があり（右岸の中須側）、近世の築堤はそれを避けてその外側に新しく設けられた。従って新土手よりも低いこの自然堤を「中土手」と呼んでいた。往古、古川からの河水が中須（古市の北の）でこの河道に入りつくり出したものであろう。中土手がみられるのはこの付近だけである。現安川は上安方面からきてそのまま直線化されて古川へ注ぐ。安川洪水時の水はけを良くし、下流部での堤防決壊や冠水を防ぐため、「大町」と示した付近から一気に古川へ落すことにした（昭和30年—1955）。従って、八木用水は河道下をサイフォンで通過するように改築された。古

市以南の旧安川は廃川敷となり、大部分は公園・道路敷の拡張（旧堤防上の通路を広げる）に利用されているが、それでも西原付近では先述したように旧右岸側の道路が旧左岸のそれに比べて低くなっている。

自然堤防では古市の市中部で10米、祇園の市中部で6米、新庄で6米となっている。古市の10米は緑井の10米に匹敵し、その成立期に類似性をもたせる。逆に祇園は新庄に類似性を考える。緑井のPから出た自然堤防はBを通り旧国道を下って古市の市中に至り、そこで古川沿いに（P、矢印）を一気に南下する。しかし、西原でも中～南部ではRの自然堤から分かれて一気に南へ人工堤を中心に建設したようである。このあたりでは堤外は畑地中心、堤内は水田と明瞭であったが、それを目処に築堤を進めたのかも知れない。「八木市」と示された付近は古川舟運の原点であったが、矢印方向に沿って自然堤防を南下すると松原に至る。このあたりまでは水防や通路として良く利用され、堤防強化が図られたようだ。しかし、このQの筋は弱含みながら（通路としてあまり利用されることもなく）南向する。そして、新国道として（54号）整備拡張され、このQの筋はほとんどその旧姿を失ってしまった。堤高は約1.5米くらいであったから1500年くらい以前からの形成ではないか。この傾向は下って古市の旧国道筋の東側にある古川の氾濫源のなかにみられた。高さは約1米であったろう。現在は貸アパート、マンション、駐車場、畑地などで完全に姿を消している。なお、八木用水や坪井川は後背湿地部を流れる旧河道（分流）にも関係している。

旧山本川（前名茅原川）は東山本と西山本の水を集めて東へ流れ、南折して曲折しながら山手沿いに進んで山手川に合流していた。大正15年（1926）9月、昭和3年（1928）6月の両山津波による災害を契機に現山本川への大改修に着手した（昭和7年—1932）。約10年の工事でそれは完成し、地域の人びとは水害から免かれることができた（<sup>〔附圖〕</sup>）。旧西原村と旧長束村の境界付近は八木用水がきて安川に沿いでいるが、付近の安川は東へカーブしており（近くに蓮光寺）、堤防はもちろん見当らない。敢えて推論すれば、それはかつての茅原川の河道の残像で、このあたりの安川は周囲一

#### 東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

帯に広く堆積した土砂の下を伏流して水量も乏しく、当地だけで曲流部をつくるだけの水勢はなかったと思われるためである。また、茅原川が南折しても堤防は内側（山側，右岸）のみにつくられており，東へ流れてきた水はそのまま流出し続けてもかまわないといった昔からの社会的条件が考えられる。国道の通るこの一帯は土砂の堆積がある畑地で，明治になって村役場や学校が位置して村の中心となった。

#### （4）新庄の咽喉部

中筋低平地に続く新庄の咽喉部は，西の新庄と東の牛田の両山地の山麓で，ともに高度10米のラインが通り，その間の東西幅は約1500米である。当地付近で指摘される項目をいくつか拾ってみると，

- ① 広島デルタの頭部とされていること。
- ② 広島湾岸流の感潮部であること。従って北からくる河川の水勢を止めるため，長束や西原付近では堆砂を促したり，河道の変更に影響を与えたこと。

- ③ 旧建設省（現国土交通省）太田川工事々務所内での太田川上・中・下流の区切り方で，当地付近から川上を上流に考えていること。

などがある。①は湾内に向って扇形に開く水面の頭部であり，デルタ形成のスタート部分となった。②では厳島東側の厳島瀬戸を入った漲潮流は湾岸部も洗いながら東進し海田湾内に到達するが，一部は坂沖を南下して呉湾に向かう。落潮流はその逆方向となる。しかし，デルタの拡大はその方向に直交する形で進み潮流の主部も南へ押し下げられてはいるが，宇品島（元宇品）を回っての進行は継続されているようだ。この流向が弱められ，新庄付近での大芝水門からの淡水の市内流出も放水路への分水を兼ねる形になった現在では，海田湾の汚染の進行が懸念される。

さて，満潮時における当地付近での水位上昇は普通の場合に比べて高い時もよくみられたのではないか。一般に満干潮の間の時間は6時間であり，1日では満干を2回経験する。広島湾では南北方向の風向が卓越し，午後

は南風が発生し易いので、その時に満潮が重なれば潮はさらに北へ押し上げられ、感潮の水面も一層拡大し長時間にわたって北から南下する河水を止めさせ逆流させることになる。それは当地域の堆砂量の増加や灌漑のための淡水の貯水にもつながるわけだ。

見出し図中の東原村・西原村と示している付近は川幅も広く古川（前太田川）の河口とみられる。また、その水勢の強さを示したものであろうか、河口の正面の対岸に東原領分が広がっていた。洪水時には渦流も発生していたのであろう。他方、西部では西原・長東・山本・祇園の境界が押し寄せているが、先述した茅原川（旧山本川）が長東と山本の境界に続いて、その延長は長東と祇園（南下安）の境となり、さらに長東と西原の境になるという複雑さをもつ。このことから、茅原川の延長を蓮光寺（先述）の北あたりの安川の弯曲部まで推定させることになりはしないか。満潮水位によって押し戻された河水は坪井川を逆流し、祇園市中の自然堤防近くにも滞水したであろう。古代の船出に関係したという「帆立」は堤防の南部長東・山本・西原・長東の境界付近にある。

### 3 とくに八木用水について

#### (1) その現状

八木用水は八木から引かれてきた用水路という意味をもつ通称で、その点では太田川が中世には佐東郡（佐西郡＝現在の佐伯郡）の郡境を流れる意味で「佐東川」と呼ばれていたことに類似する。芸藩通志（文政2年—1819—村々からの諸資料の差出しを命じ10年後に完成したもの）では常用水渠と記し、その水路筋となる差出帳での村絵図では八木・緑井・西原・長東各村にはその名記がなく、僅かに中須村に「定用水」、中筋・古市村で「ミゾナリ」の表現があるのみである。用水路の開通時の大歓迎とは裏腹に、この表現力の弱さはどうであろうか。

用水路建設の当初は、見出し図のそれがほぼ示しているようであるが、その後はとくに戦後において都市計画にともなう道路や学校用地の拡張、

#### 東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

水路の3面コンクリート化、八木峠の東側に水門を掘ることでの短絡化（八木の城山迂回の回避）などで変化を受けた。また、一帯にみる昭和37年（1962）ごろ以降の都市化で主として生活廃水が流入し、道路の舗装も含めて雨水は一気に水量を増加することがあるものの、とにかく水流はスムーズである。昭和の戦前と戦後で用水路の利用は大きく変化する。戦前までは近世の影響を受けて土地改良区が用水路を管理し（現在も市祇園出張所に事務所がある）、地区代表者によって組織が維持されている<sup>4)</sup>。都市化の進行で耕地は減少しているが、僅かでも水田や畑地のあるところでは用水の利用を可能にしている。しかし、ゴミの投棄や水質の悪化は避けられず昔のように市場出荷する野菜の洗浄はできないし、水路はコンクリートで固められてウナギや魚もみられず、汚れを示すアオモがとくに古市以南で水中に多くみられる。戦前は古市に煮扱屋（麻製造）が多数あり、毎日の操業で麻を煮た廃水が流れ込んだ。下部の西原は直接間接にその影響を受けたが、社会的に大きく取上げられなかったようである。筆者が調査中に、地元の人がただ一言「古市はトノサマだったから」と言われたのが妙に頭に残っている。古市の麻糸・麻緒・麻綱づくりは近世には有名で、浅野藩の家老上田主水の支配下にあったわけである。麻のアクを落すために石灰を入れて煮るわけで、その煮込汁は濃い赤茶色であり、八木用水路はその排水路になった。それでも西原の農民は水がほしいので稲の成長期までは

4) 改良区の名称は「広島市祇園町外二ヶ町土地改良区」である。外二ヶ町というのは安古市町、佐東町を指す。すなわち、すでに昭和18年（1943）に祇園町、長束村、山本村、西原村、東原村を合併し成立していた祇園町を昭和47年（1972）8月に広島市へ編入した。続いて安古市町（昭和18年の古市町と安村で昭和30年—1955—に成立）と佐東町（昭和30年に緑井・八木・川内3村で成立）を昭和48年3月に編入しているが、上記の名称はこの間隙で生まれたようである。最近長束では最後の水田が消えたので、水の供給は八木～西原分となった。なお、直接の関係者は13名（理事長1名、副理事長2名、その他理事10名で構成）に事務1名が加わる。そして、別に監事3名がいる。ところで地区振分けでは祇園町7名、安古市町2名、佐東町4名となる。なお、改良区の維持費用は広島市から拠出されている。

夜半に用水沿いを古市～緑井あたりまで何軒も歩いて、用水にかけてある堰板（水止め用）を抜きにきていた。水田の必要量の水の確保は上手から下手へ順番に進むものであり、田植もそれに合わせている。しかし、水落ちの早い西原では次回への水の確保が困難であったわけだ。なお、水に乏しい長束あたりでは用水の水を風呂水に利用することもあった。

さて、用水路の本線は後尾の地図にある終部（広島市ポンプ所）から上部へ約10軒で図中番号16の太田川水力発電下に到達する。水の供給は当所からであるが、それ以前から水を流していた水路は点線で示してあるように、さらに約3.75軒上流へ伸びている。そこにはコンクリート製の取水口があり、水路は3面コンクリートで建設されている。江戸～明治にあった内川はすでになく（洪水の影響）、取水口はこの水門まで伸ばさざるを得なかった。そこは、実は内川の出発点でもあり、卯之助は内川の途中から引水しているが、やはり取水点はこの水門あたりを考えていたと思われる。なお、後尾の八木用水関係図で一部示したように支川（過剰にならぬように水はけを促す）が設けられ<sup>5)</sup>、それを含めると管理区間は約16軒であるという。なお、流量（中国電力太田川発電所からの放水の一部）は以下のようになっている。

10月～5月 0.5t/s；6月1日～30日 1.7t/s；7月～9月 1.5t/s

そして、降雨量が5ミリメートルを超えると自動的に用水路への水の供給は止める仕組みになっている。

## (2) 建設の史的事情

先年、地元のテレビ局から八木用水が約250年過ぎても依然として水勢を保ち得ているのはなぜか、という質問を受けたことがある。それは文化財的な面もあるのですでに広島県文化財協会の「広島県文化財ニュース」に述べて置いた（〔八木用水の壱〕）。八木用水は通称名であって、芸藩通志では村絵

5) 樋門の監理は理事に委託されている。

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

図で中須村に「定用水」とあり、沼田郡の川<sup>かわ</sup>瀆<sup>とく(う)</sup>で太田川・安川に並べて常用水渠の3項目をあげて説明をしている。ここで1つ注目すべき点は通志では「常用水渠、明和四年（1767）工匠卯之助、匠夫して穿<sup>く</sup>つ」とし、大正11～14年（1922～25）の広島市史第二巻浅野重晟（第七代）の編年紀で明和六年四月二十四日の項に、祇園町大工桑原卯之助に許して溝渠を鑿<sup>ほ</sup>らしむ」としている点である。口碑によれば20日間くらいで用水路は完成し、水がきたことに西原村民は欣喜雀躍したという。「穿<sup>せん</sup>」は掘り開く、穴をあけるの意味であり、「鑿<sup>さく</sup>」は道具のみのことであるが（うがつ）の訓よみに従えば井や池などを掘るという意味にもなる。広島市史がこの字を使用していることは鎚やの<sup>きね</sup>のみを使って岩を砕いたことを想定させる。すなわち、卯之助の工事の苦労は八木城山の周囲をめぐる用水路で岩を砕く点にもあったということであろう。戦後、昭和27年（1952）その迂回を止めて八木峠に並行してトンネルを掘り、山手川につなぎ用水路に水を落したが、卯之助もそこに水の洞門を掘ることを考えていたのであるか。今では知る由もない。

この八木用水は八木—緑井—中須—古市とつないで西原に至り、長束との村境を西進して安川に注いでいる（これは明治中頃のこと）。蔵入地の西原村ではすでに宝永（1704～08）、正徳（1711～15）、享保（1716～35）の年代にわたって用水の確保を藩に要望していたという。藩としても、城下付近での水の管理もできないということになれば体面にもかかわることであり、最初は古川で古市と西原の境界付近から引水を設営した（先述）。しかし、水量の過不足が甚だしく失敗した。次は中須付近、そして上緑井・下八木付近を計画したがやはり水の<sup>り</sup>が悪かった。そこで、祇園町の大工桑原卯之助の提案があり、彼に全責任を負わせることで郡内の人夫を動員し工事にかからせた。芸藩通志は「常用水渠、明和四年穿<sup>く</sup>つ」としているが、先述の浅野藩主七代重晟の編年紀には「卯之助八木以南四里の地を測量し設計を定めて工事を経営し明和五年（1778）竣工す……」とある。通志との間に1年のズレがあるが、編年紀の方を採りたいと思う。ともかく

常用水渠といわれるように常に水が通る水路として、現代に至るまで命脈を保つことになる。通水当初、17村民が喜んだというのがその村名は想定するしか方法がない。とくに喜んだのは安川の水を用水路で引いていた安地域の村民であって、それは藩命で西原付近の水不足を補うために取水制限が厳しかったための反動でもあった。安地域では山も近くで大きく広がっており、谷水を利用するのは当然としても、川沿いでは1～2軒も先から引水して灌漑する面もみられたわけである。以下、関連事項の主要点にふれる。

### (3) 取水地点の設定

最初の取水地点は見出し図にあるように、太田川橋の川上の「眞蒲」の地であり、中世では十歩一河原と呼んだ。大きな中州の内川から引水しているが、この意味では取水口はもっと川上の「渡場」付近になり、堰を考えてなくとも本流からの分水常時得られる体勢下にあったろう。この地図は明治27年の測図であるが、大正初期の水害後はさらに約4軒上部へ水路を伸ばして取水することにした（後尾の図）。このあたりは太田川の沖積作用の始まる部分であり、河床も栗石の多い場所から砂州の発達する部分（近世は砂川という）に変わる場所でもある。大正～昭和初期を通じて太田川上部の各地に水力発電所が建設され、太田川の水位も下がったが、基礎的水量は確保されていたようで、河中へ出した堰を通じて一定水量は用水路の方へ確保されており、八木・緑井・中須・古市なども恩恵を受けたが、とくに西原や長東に大きいものがあつた。西原付近は古代～中世には河口であつたようで堆砂が大きく、開田された後も田植時には引いてきた水がみる間に乾いていったという。そのためか西原には畑地が広がっていた。しかし、この引水は米よりもむしろ野菜（西原人参）の収穫を重点づけた（後述）。

さて、水路の大規模な掘割は築城にともなう外堀や内堀、城下への舟入りなどを通じての水の流入と排出、城下町と上水道、運河、洞門などが近



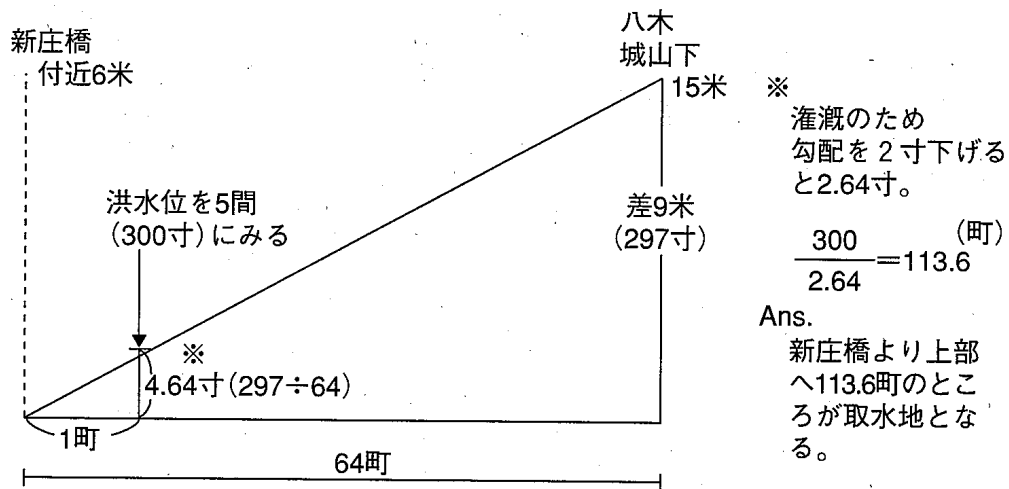
東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

世にみられるが、河川からの引水による灌漑はその後続くもののようである。広島県内の内陸部各地にも多くの溜池がみられるが、17世紀も末頃になると溜池にみる用水確保の不安定さ（小規模なものが多く、そのために、池をもつ1つの谷でさらにその上部に二重に谷をつくること—ときには三重に設定）から、河川を利用して長い水路を引くことが考えられるようになるのも、開田にともなう自然の傾向といえよう。資金的にも余裕が出てきたということであろうか。河川から引水しての水引きでは、途中で分水して利用することが求められ（小用立<sup>こようたて</sup>）、徒らに直流水路ばかり設営するわけにはいかない。そして、水路では長路にわたって滞水時間を長くすることが求められるが、田植時には一度に大量の水が地区ごとに必要となるので、対応する水量が継続的に維持されねばならない。逆に地域に長雨があると溢水し、水損を起こす場合もある。必要なときに必要量の水が広い地域にわたって得られるということは重要であり、それにアプローチできるのが河川灌漑である。八木用水の通る各村でも自村の用水路を含めて、排水路と井堰を設けて余分の水は古川や太田川・安川へ排水するようになっている。

ところで、卯之助がどのような事情で取水点を求めたのであろうか。少くとも天正19年（1591）毛利輝元の広島入城に代表される広島城下の設営では大工関係の技術者はみられなかったようだが、元和5年（1619）福島正則改易により紀州から来広の浅野長晟には大工棟梁（1名）が随行している。1600年代の末ごろには河川灌漑の技術が紀州でも応用され始めた。大畑才蔵は紀州領の諸川について、河川の長さ1町につき4～5寸勾配（砂川）、6～7寸勾配（栗石まじりの部分）などを考え、引水する諸計算をしている（『講座日本技術の社会史6土木』<sup>6)</sup>）。この塚本学の紹介した大畑才蔵の考え方を卯之助が知っていたかどうかは不明であるが、その方法は当地でも応用できるのではないか。すなわち、図7はそのことを示している。

6) 塚本 学「用水普請」、『講座・日本技術の社会史6土木』、217頁。

図 7 八木用水の勾配を考えるための概念図



この西原を含む中筋低平地では前記したように東西の山麓線は10米であり、洪水時の水位の最高限界もそれに近い。そこで、洪水時の水位を5間に考え常時その高さに水がくるようにすれば良からうと卯之助は思案したのではないか。彼は八木には何度も出かけていたというが、とくに洪水時における水勢には注目していたと思われる。屋根の勾配は1尺につき4寸ないし4寸5分が原則であるが、河川では1町につき何寸という考え方をする。新庄と八木の城山の下での高さの違いは9米（6.3米と15.3米）とみれば、9米は297寸になり、両者間の距離64町で割ると4.64寸を得る。いわゆる1町についての河川の平均勾配である。用水<sup>たて</sup>立では勾配を緩くして滞水度を高める必要があり、そのためにこの数値から2寸を引く。このあたりは大畑才蔵の見識に従はざるを得ない。なお、塚本は現在地より10間上に水を引く場合ということが例としてあげているが、筆者はここでは西原付近において5間を最高水位として考えることにした。なぜなら、当地ではこれ以上に水はこないからである。卯之助もそのように考えたであろう。

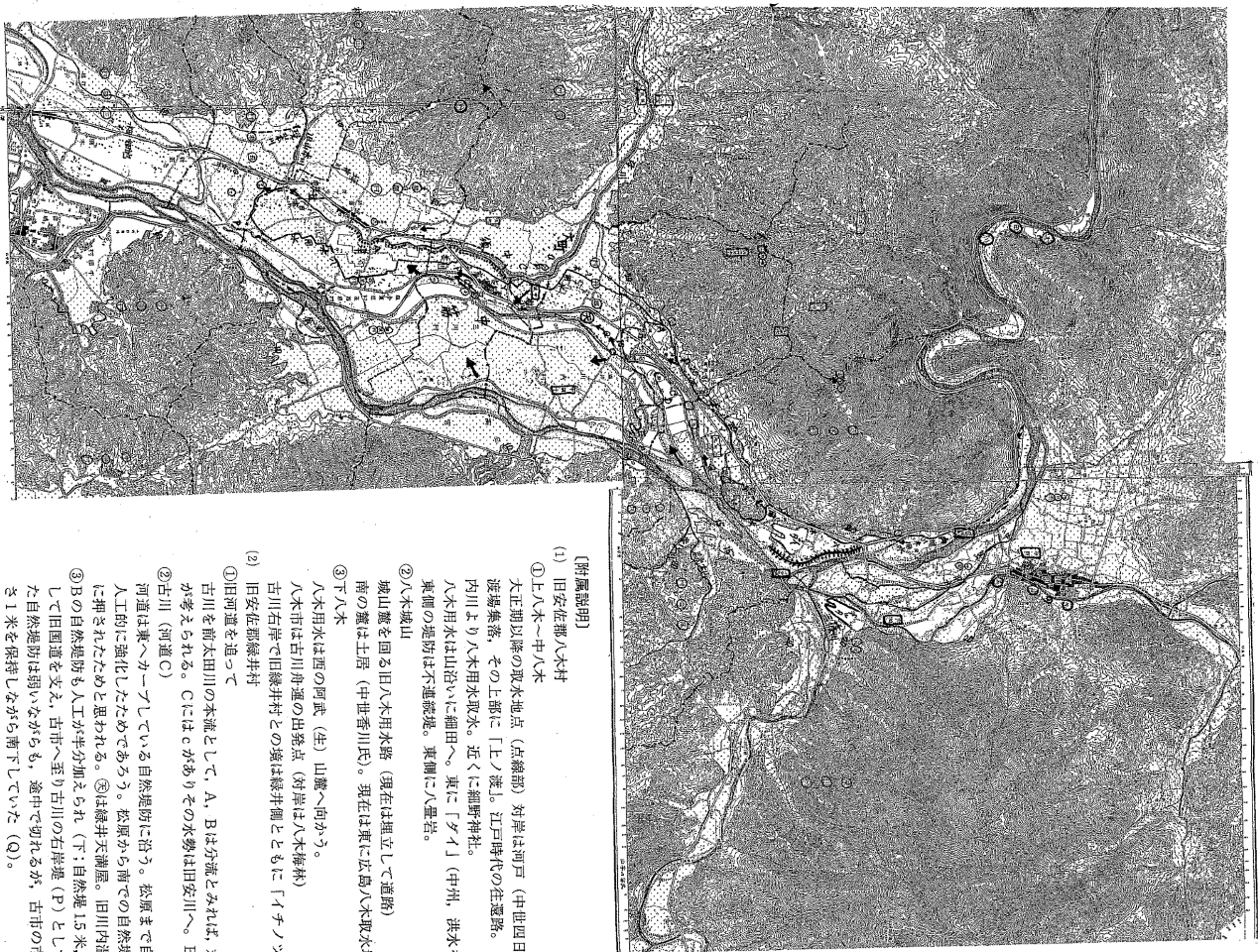
さて、4.64寸から2寸引くと2.64寸になり、それを洪水位の5間（300寸）から割り出すと113.6町を得る。すなわち、64町よりもさらに約49.6町上流へ取水地点を設定しなければならないことになる。彼はなお、これ以

#### 東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（前）

外に地形上止むを得ず山麓に用水路を引かねばならないが、そのことによる利害も計算していたかどうか、その点は不明である。しかし、彼の時代までに引かれていた河川からの村地域での用水路を利用することができた（八木用水のために）のはやはり藩のバックがあつてのことであつたろう。さて、八木用水が地形上山麓寄りを通っている部分は旧八木村の部分であるが、取水地点から南へかけての上八木では太田川の河道の関係上山寄りにならざるを得ないし、中八木も同様である。城山を回る部分は岩を砕くことで苦勞があつたろう。八木峠から南一帯の下八木では堤防決壊による用水路の維持を考え、丘陵寄りを<sup>じょうらくじ</sup>上楽地（阿武山麓）を南下する。阿武山容が大きく伏流水を得易い点、洪水の被害を最小に押さえることなどを考えていたのではないか。緑井に入ると、水路は山寄りを離れる傾向下にある。10米の高度を考えると古代から水田のあつたところで、古くは谷水を引水していたものか、用水はそれに直交する形になるためサイホンの原理を応用したと思われる埋樋の一部が発見された。戦後、用水路を三面コンクリートにするための工事の際に水路敷の下から掘り出されたのである。なお、このサイホンによる水送りのことを「伏越埋樋で水を渡す」ということばで表現する。

#### 参 考 文 献

- 『文政二年高宮郡国郡志御用につき下調べ書出帳』、可部郷土史研究会、1994年。  
『祇園町誌』、祇園町、1970年。  
『増補改訂鉄道略年表』、日本鉄道図書（株）、1963年。  
『古市町誌』、古市町、1955年。  
『講座・日本技術の社会史6 土木』、代表編者永原慶二、山口啓二、日本評論社、1985年。  
『広島市史第貳巻』、広島市、名著出版、1972年。  
『新修広島市史第三巻社会経済史編』、広島市、1959年。  
大石久敬原著、大石信敬補訂、『地方凡例録下巻』大石慎三郎校訂、監修竹内理三・豊田武・児玉幸多・小西四郎、日本史料選書④、近藤出版社、1989年。  
『広島県地質図説明書』、今村など、広島県、1959年。  
小畑浩、『中国地方の地形』、古今書院、1991年。

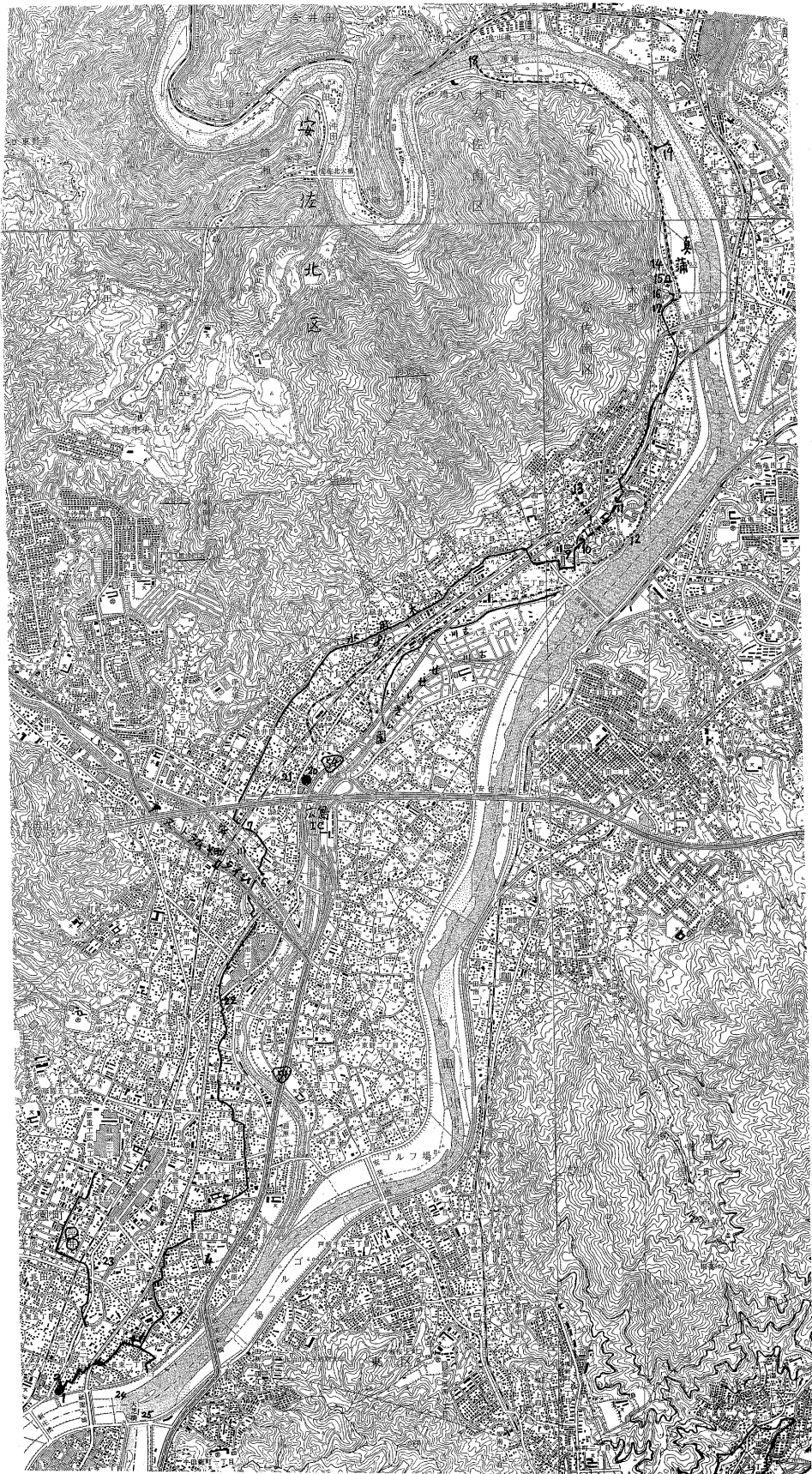


この地形図は、国土交通省  
国土地理院の明治27年版<sup>1/50,000</sup>  
「可部」「深川」「狹間」に  
加筆したものである。

- 〔解説〕
- ① 旧安佐郡八木村  
② 上八木～中八木  
大正期以降の取水地点（点線部） 対岸は河戸（中世四日市）。  
逆巻集落、その上部に「上ノ流」。江戸時代の往還路。  
内川より八木用水取水。近くに細野神社。  
八木用水は山沿いに細田へ。東に「クイ」（中州、洪水を避ける台地状）  
東側の堤防は不連続。東側に八雲岩。  
③ 八木城山  
城山麓を回る旧八木用水路（現在は掘立して道路）  
南の麓は土居（中世香川氏）。現在は東に広島八木取水場。  
④ 八木水  
八木用水は西の阿武（生）山麓へ向かう。  
八木市は古川舟運の出発点（対岸は八木峠）  
古川右岸で旧縁井村との境は縁井川とともに「イチノツボ」、奈良間のスタートか？  
⑤ 旧安佐郡縁井村  
⑥ 旧河道を辿って  
古川を前太田川の本流として、A、Bは分流とみれば、対安川の関係で、(A→a)、(B→b)  
が考えられる。Cにはcがありその水勢は旧安川へ。Bがaやbに重なる場合もあるだろう。  
⑦ 古川（河運C）  
河道は東へカーブしている自然堤防に沿う。松東まで自然堤防が十分であるのは洪水防止で  
人工的に強化したためであろう。松原から南での自然堤防の発達弱さは、洪水時の水勢D  
に押されたためと思われる。⑧は縁井天満屋。旧川内堤防の堤防はよく決壊した。  
⑨Bの自然堤防も人工が半分加えられ（下：自然堤15米、人工堤15米）計30米の高さ。南下  
して旧河道を支え、古市へ至り古川の右岸堤（P）として南下する。他方、天満屋付近にあり  
た自然堤防は弱いながらも、途中で切れるが、古市の市街地の東側で古川の河床のなかに高  
さ1米を保持しながら南下していた（Q）。

- (3) 旧中須村（明治22年、旧太田村とともに旧安村に合併）  
① 安川筋（昭和30年以後古川へ安新川）、昭和30年。  
aーbをそのまま延長して古川へ（安新川）。昭和30年。  
b付近は「来船」。そして近くの稲荷神社は縁井村も兼ねた氏神であったが後に分離。縁井に  
は縁井神社があった。その資材は太田川河口部へ川船で運び、海船へ積まれたと考えられる。  
② 旧太田村の東側に南に伸びる旧中須村分  
古く温田地帯、かつての河床部で島のつく地名や黒河などがある。

- (4) 旧川内村  
① E・Fの河運から  
古川が1600年代の当初から現太田川へ移行するまでに、すでに洪水時も含めて分流していた  
ようだった。E・Fの頃は十分に発達していない。現太田川へ転移する短期間の河運であったら  
う。
- ② 砂質  
温井側は洪水でよく決壊したが、その反面、上流から肥土氏が運ばれてきた。中瀬子側は  
1600年以降の本流のためか、砂質が強い。広島県は温井側（細砂）の方が質的に良いという。
- (4) 旧三川村  
① 中筋（古く水の集るところ）  
中筋で北へ古川沿いに突出しているのは、そこに武田水軍の将福島氏の宅があったためとい  
う（古市町誌）。当地は古川、安川（古い時代は古川へも流入したと思われる）の水運の中  
心であり、古市を支えた。古川を西へ越えて古市と合流する村を形成させたところ、米の石  
高を、可能な限り平均状態にしようとした集落という一水防上）  
② 古市の市街地（Yは旧横土手、江戸時代の建設という一水防上）  
自然堤防の高さ10米は北の縁井と並び、その成立時期もあまり違わないと思われる。なお、  
西側の八木用水路は後背地地帯を流れる水路を利用したようだった。古市の南部は古川地区と呼ば  
れる。中瀬分に古市分は旧安川を越えて広がっている。武田氏が蝦夷職人を集めたよう  
「蝦夷屋敷内」（かんじやわち）と呼ぶ。
- (5) 旧砥岡町  
① 北下安・南下安（権坂村）  
旧安の上安に対して下安が武田氏をバツクに築造し、後に上・下に分かれた。古代郷の伊福郷  
も成立（南下安）の付近かという。旧砥岡町の八日市は「佐東八日市」として中世の淡町で  
あった。安神社は砥岡社として郷土の信仰の中心であり、砥岡社の神人も住んでいた。
- ② 自然堤防の集落、坪井川  
砥岡市の中北半と南半で南・北下安を分けるが、その境付近には細砂があった。坪井川は自  
然堤防の後背地帯を流れる川で広く湿地帯であったが、東洋機械を買収した三菱重工が工場  
を拡大し、水路は削られ水勢は弱められた。上 古土手は先安川のかつての名残りを示す  
自然堤防と思われる。
- (6) 旧西原村  
① 八木用水  
東よりは古川の氾濫原の名残りでも高く（堆砂）、水は不自由した。八木用水路もここで  
はその中央部を南下している。今津は武田氏時代の築であったと思われる。用水路が南部で  
かき形になっているのは条理と関係するといふが、土地があまりにも平面的ゆえに意識的に曲  
けて水勢をつくったことも考えてみる必要がある。
- ② 旧西原村南部  
当初の用水路が折れているように、堆砂の高まりが強く、そのために村境にもなっていた。  
茅原川（旧山本川）も明治・大正期の水害では土石流を発生させたように、開れ易い花崗岩の  
土石を一気に押し流した。旧村境が交錯しているのは、水勢の複雑な離合集散を示している。
- (7) 旧長束村  
① 旧安川より東部  
神社は長束神社で、そのすぐ前が取水路の始まりの部分であり、先年「太田川龍水神」の宣  
言を行った。南は土手細く、川を越えた大芝原は「向地」で長束分であった（現在は大芝で  
広島市西区）。旧安川を掘立して田圃水に備えた。
- ② 旧安川より西部  
旧山本川（茅原川）の運出した土砂により、北よりは高く明治には役場や学校が設けら  
れた。昭和当初から現山本川の新設工事があり、平原川に接続して水勢を整え、地域は洪水  
の不安を無くすることができた。旧山本村、旧長束村は古代の桑原郡といひ、大田川筋の河  
口部で倉庫敷があった（蔵敷社領のそれも同様）。桑原新庄の名残が現在の新庄という。



凡例

- 1 ポンプ所 (排水)
- 2 ポンプの横に入水用の排水口
- 3 原簿小学校
- 4 NHK西沢放送所
- 5 原小学校
- 6 安川の下をくぐるサイホン (入水用) (右岸側にゴミ受け場がある)
- 7 JR緑井駅 (入水用の川の5〜6mくらいの幅、洪水時の水通しの役割)
- 8 自然堤防の始まり (東側の点線も同様)
- 9 広商市入水取水場 (高瀬堰)
- 10 入水用水隧道 (南出口)
- 11 入水用水隧道 (北入口)
- 12 隧道以前の入水用水路 (菅川、城山を迂回していた)
- 13 山手川 (10のところで入水用水に注ぐ)
- 14 細野神社
- 15 桑原町之助の石碑
- 16 中国電力太田川発電所 (昭和37年)
- 17 桑原町之助の石碑の旧位置 (堤防改修、発電所給水で旧に移転)
- 18 大正期以降での入水用水取水口 (しかし、16の完成により同所から給水することになった)
- 19 上ノ渡 (江世) にか楽橋 (現存せず)
- 20 緑井天神庭
- 21 緑井町市町会 (商業兼住宅地)
- 22 安佐町区役所
- 23 このあたり旧安川が埋り込む形である点に注目する
- 24 相模川門 (南へ太田川放水路、太田川)
- 25 大芝水門 (南へ広島市街地)

(注として)  
この地図は国土地理院発行 2万5千分の1「相模川」「中深川」「相模川」「飯坂」を使用したもので、それに関係事項を注記したものである。